様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３４７０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７２００３０

研究課題名（和文）チベット伝来梵文仏典写本を用いたインド・チベット文化交渉史の総合的解明

研究課題名（英文）A study of the reception of Sanskrit manuscripts in Tibet and their impact on Tibetan culture

研究代表者
加納　和雄（Kano, Kazuo）

高野山大学・文学部・准教授

研究者番号：００５０９５２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：インド・チベット間の文化交渉史において従来顧みられなかった側面を究明するにあたり、本課題は梵文写本の果たした役割に注目する。特に①チベットに伝存する梵文写本の由来、②それら写本がチベットに請来された目的、③梵文写本がチベット文化に与えた影響、以上三点について逐次解明を試みた。
　①由来は、写本奥書の網羅的調査により主に西北及び東インド、ネパールに辿られた。②請来目的は、梵文写本の訳出と学習とを目指していた点確認した。③梵文写本がチベット文化に与えた影響は、信仰と教育研究との両面で確認した。人々は梵文写本を信仰のよりどころ（スンテン）とし、碩学たちは訳文改訂の底本として用いた点、明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In order to clarify one aspect of the history of Indo-Tibetan cross-cultural exchange, this study focuses on the role Sanskrit manuscripts played in the Tibetan Buddhist world. It (1) traces the origin of manuscripts, (2) identifies the purpose of taking the manuscripts to Tibet, and (3) assesses the impact of the manuscripts on Tibetan culture.
I have (1) traced the origin of most of the manuscripts either to East India, Nepal, or Kashmir, (2) identified their translation and study as the main uses they were put to in Tibet, and (3) assessed their impact in two regards, namely, as sacred objects of worship among Tibetans and as witnesses utilized by scholars for revising Tibetan translations.

研究分野：インド学・仏教学

キーワード：仏教学　梵文写本　国際研究者交流　インド・チベット文化交渉

１．研究開始当初の背景

梵文仏典写本は、アジア諸地域に流布する各国語訳に訳された仏典の、オリジナルの言語を直接に確認しうる唯一の原典資料であり、インド仏教思想の原像を知るための第一次資料である。しかしながら、漢訳やチベット語訳大蔵経の豊富な二次資料と比べると、現存する梵文写本原典の数はかなり限定される。それは、インド本土で仏教の伝統が途絶えたことにより、写本そのものが散逸したばかりでなく、梵文仏典写本を代々伝承してゆく母体たる仏教徒たちがいなくなってしまったためである。現存する梵文仏典写本は、それゆえ、チベットやネパールなどの周辺諸国に伝来されているものが大半を占める。というのも、それら周辺地域には、インドに由来する仏教の伝統が連綿と生き続いており、写本を伝承する母体がいまなお息づいているからである。

なかでもチベット伝来の梵文仏典写本は、高地特有の乾燥・寒冷な気候のおかげで、とりわけ古いものが多く、保存状態も良好である。そのほとんどは、インド留学をしたチベット人の翻訳僧たちや、インド仏教終焉期に難を逃れチベットへと亡命したインドの高僧たちがもたらした写本であり、10～14 世紀にインド(中世南アジア仏教文化圏)で作製されたものである。チベット人たちは、インドからもたらされたこの「宗教文化遺産」を寺院の至宝として厳重に管理してきたため、相当な数が現在にまで残されている。これは中国本土で漢訳の際に底本として請来された、膨大な数の梵文写本が散逸してしまった状況とは対照的である。またネパール伝来の梵文写本と比べても、チベット伝来の梵文写本は古いものが多く、稀少価値の高い孤本の数が突出している。

チベット伝来梵文仏典写本の研究は、国内では、20 世紀初頭の河口慧海のチベット入国に端を発する。国外では、中国が 1950 年代にチベット各地の寺院に分蔵されていた梵文写本をラサに集め、その後、一部をフィルム化および目録化し、近年は中国政府の主導のもと、梵文写本研究プロジェクトが始動し、さらなる研究の進展が期待されている。またインドの R.サーンクリトヤーヤナおよび、イタリアの G.トゥッチは、各々独自に 1930 年代にチベットを訪ね、梵文仏典写本を撮影し、その写真資料はパトナ、ローマ、ゲッティンゲンに所蔵され、世界中の研究者が解読を試み、近代の仏教研究に劇的な学術の進展をもたらした。しかし現在までに解読・刊行されてきた写本は、チベット自治区に現存する梵文仏典写本の総数のおよそ三割にも満たず、残された課題も少なくない。

このように国際的な規模において、チベットに伝来する梵文仏典写本は、資料価値の高さが注目され、インド仏教の原像を明かそうという意図のもとで解読が継続されてきた。申請者自身も、平成 20-21 年度の助成金による支援を受けて、未比定写本の解読、目録の整備、電子化という 3 点に焦点を当てた研究を続行し、その成果に基づいて、さらなる発展研究の可能性を模索してきた。

以上のような解読を主とする梵文写本研究は、インド仏教思想解明のために今後続けねばならない重要課題だが、その一方で、その重要性に偏重するあまり、総合的な視点を欠いてきたきらいある。

２．研究の目的

このような写本解読に偏重してきた研究史に反省を促し、写本がもたらした文化的役割に光をあてるために本課題は、以下の(A)(B)(C)の三点に視点を定めた。

(A) チベット伝来の梵文仏典写本の由来、

(B) インドからチベットへの梵本流伝の様相、

(C) 梵本がチベット文化に与えた影響。

インドのどの地域から梵文仏典写本が伝来したか（写本請来元の特定）を検討する「写

本の由来」と、それら写本がチベットに導入された様相（人と物の流れ）を考察する「写本の流伝」、そして写本がチベット文化に及ぼした影響（写経の方法など）を考察する「写本の文化的受容」という点から各々個別的に解明した上で、それら成果を統合してインド・チベット間の文化交渉の歴史の解明を目指す。これにより従来の、写本の解読研究に欠けていた視点を補い、写本研究がアジア全域の文化交流史の解明に展開しうる。これはまた上記の、申請者が継続してきた梵文写本研究と有機的に連結し、その展開研究を可能にしうる。

３．研究の方法

本研究では、チベット伝来梵文仏典写本の、(A)由来、(B)チベットへの流伝、(C)チベットにおける文化的受容の 3 点を解明するために、(A')梵文写本の奥書、欄外書き込み、字体等を精査してインドにおける梵文写本の作成年代・地域を特定し、(B')写本奥書や歴史文献(仏教史、伝記、寺院史)に基づいて梵文写本がチベットに請来された年代・地域・目的とルートを比定して人の流れの軌跡を明かし、(C')1. チベットで梵文写本が学問的用途に使用された例を回収し思想文化の受容を明かし、2. 梵文写本とチベット語写本の形状や書式を比較して筆記文化の受容を明かし、3.チベット仏教寺院の実地・文献調査に基づきチベット世界における梵文写本の信仰上の用途、宗教価値と機能を識別して宗教文化の受容を明かす。以上(A')(B')(C')の 3 点の調査を 3 年間で遂行した後、第 4 年次にそれら成果を統合しインド・チベット文化交渉の歴史を総合的に究明する。

４．研究成果

(A) 梵文写本の由来

①チベットに現存する梵文仏典写本が、(a)インドのどの地域で、(b)いつ作成され、(c)いかなるジャンルに属する作品があるかという点を解明すべく、諸写本の奥書を回収、校訂、和訳した。

・奥書情報の収集は、ラーフラの写本目録(Sanskrit Palm-leaf Mss. in Tibet, *JBORS* 21/1, 1935, pp. 21-43; *JBORS* 23/1, 1937, pp. 1-57, *JBORS* 24/4, 1938, pp. 137-163)所収の奥書の記述を利用することにより作業の効率化を図った。同目録未収の写本についてはゲッティンゲン大学図書館とローマの国立アフリカ東洋研究所(IsIAO)を訪ねて各機関所蔵の写本写真資料を用いて補った。

・データを電子化し、(a)書写地域ごと、(b)書写年代順、(c)作品ジャンルごとにそれぞれグループ化して配列し、一覧表を作成し、その分布を色分けして、地図上にトレースし、可視化した。

・梵文写本筆記地の地図上の分布と、9-12 世紀のインド仏教寺院（東インド、カシュミール、ネパール）の分布とを比較し、両分布の重なりの程度を確認した。とくにヴィクラマシーラ寺院で書写された梵本を特定しリスト化した。

・奥書が写本書写地・書写年代に関する記述を欠く場合は、字体や写本の素材・形状等に基づいて書写地域・年代を推定した。（以上、学会発表⑪⑫⑬）

・総合すると、東インドおよびネパール由来の写本が多い。インド人亡命僧及びチベット人留学僧達がもたらしたものである。一方カシュミールからの将来写本が少ないのは、西チベットの諸寺院の衰退及び梵本を蔵していたトリン寺の焼失が関連していると予想される。

・カシュミール由来の、15 以上の仏典を含む集成写本を、中国研究者の李、葉両氏と共同研究した（下記論文⑫⑯㉘）。もうひとつカシュミール由来の密教儀軌次第を集成した樺皮洋装本（1057 年書写）について奥書と内容を検討し、ジュニャーナパーダの

『普賢成就法』原典の存在を確認し発表した（論文⑱）。

(B) チベットへの梵文写本の流伝

②奥書情報収集のための補充調査として、ゲッティンゲンとローマを再訪し不備を補った。梵文写本がチベットに請来された目的を調査するために、各写本についてチベット訳の有無を確認し分類した。蔵訳が現存する作品についてはさらに、その梵文写本が訳の底本とされたか否かを、内容の比較によって特定し、特定しえたものは訳出底本として請来されたと判断し、請来目的を確定した。
③チベット訳の底本とされなかった梵文写本と未訳の写本は、主に学習用に、一部は読誦や供養に用いられたと考えられる。
④梵文写本をチベットに請来したインド人学僧、アティシャ、ヴィブーティチャンドラ、ヴァナラトナに焦点を当て写本奥書とチベット史書や先行研究から関連情報を網羅。
⑤インドからチベットに梵文写本を持ち帰ったチベット人を特定するため、グー・ハツェ、ヌル・タルマタクパ、シトゥ 8 世に焦点を当て伝記資料類を調査。
・彼らが写本請来時に使用した経路を史料記述から特定し地図上にトレースした。（論文④⑫⑯㉛、学会発表⑩⑪）

(C)チベットにおける梵文写本の文化的受容

⑥チベット人仏教徒は梵文写本をどの程度学習して仏教理解に役立てたのかという点を解明するために、(a)チベット撰述注釈文献にみられる梵文写本の使用例を回収して分析検討し、(b)梵文写本の欄外余白に記入されたチベット文字による注記を網羅的に回収して整理・分析した（論文㉗）。
⑦梵文写本がチベットの写本文化に与えた影響を明かすためにチベット語古写本（敦煌文献から、書式が定着する 14 世紀まで）のサンプルを厳選し、時代順に配列し形状や書式の点から比較。
⑧梵文写本の信仰上の用途、それが持つ宗教的価値・機能を解明するために、チベット仏教寺院における梵文写本の管理方法について実地調査と文献調査(仏教史、伝記類)の双方向から検討した。
・実地調査では、写本所蔵するサキャ寺の図書室を調査しインタビューを行った（2012 年 8 月）。梵文写本が聖遺物として仏塔に奉納されたり高僧や権力者の間で贈与されたとする逸話の実態を究明した（論文㉜）。
⑨梵文写本が請来当初、いずれのチベット仏教寺院に保管されていたかを特定するため、上記④⑤の調査成果に立脚し、写本(およびそのチベット訳)の奥書やメモ書きにみられる請来先と写本所有者に関する記述を集め、情報を整理・分析した（論文㉛）。
・請来後、梵文写本はいかなる目的で、いずれの寺院に移転されたか(寺院間の写本借覧貸与)を解明するため、寺院縁起類や巡礼記文献に散見される記述を回収、整理、分析した。アティシャの私蔵書など特定の梵本コレクションが訳文改訂などのために借覧されていた状況を確認した（論文④㉛）。
⑩20 世紀以降にチベット伝来梵文写本が世界にもたらした影響を解明するため、20 世紀初頭のチベットにおける梵文写本調査の実態をラーフラの自伝『わが人生の旅路』とゲンドゥンチュンペーの紀行文『世界知識行』により調査し、それ以降の展開は E. Steinkellner 著 *A Tale of Leaves* (Amsterdam, 2004)および関連資料を参照しながら新たな知見を補い発表した。また現在梵文写本を所蔵する寺院 (ポタラ宮、西蔵博物館等)の近況を明らかにした。（論文④、学会発表⑦～⑬）

以上①～⑩で解明した事項を時系列に従って整理・総括して全体像を把握し、インド・チベットの文化交渉を(a)思想、(b)地理、(c)文物の各側面からそれぞれ考察した。その

ケーススタディとしてアティシャ私蔵の梵本がチベット仏教世界で伝承されていゆく過程を明らかにした（論文④㉛）。

今後の課題としては現在進行中の梵本解読プロジェクトを完成させることが一点目である。つまり『大乗荘厳経論』関連の梵本解読（論文⑤⑨⑩⑲）、カシュミール由来の梵本解読（論文⑫⑯⑱㉘）、『牟尼意趣荘厳』梵本解読（論文⑭⑳㉓㉙）の継続である。

そしてほぼ散逸しているアティシャの私蔵梵本コレクションの所在を突き止めるのが二点目である（論文④㉛）。

さらには三点目として、今回の成果をもとに、中世のアジア仏教文化圏における蔵書管理の在り方を究明し、書写文化の実態と時代的地域的変遷の解明へとつなげてゆきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 32 件）

①加納和雄、「チベット撰述文献に伝わる真諦の九識説—ツォンカパ著『クンシカンテル』とその周辺—」、『眞諦三藏研究論集』、京都大学人文科学研究所、2012 年、345-399 頁。（査読無）

②加納和雄、「インド後期密教における如来蔵への言及とその解釈—タントラ注釈書を中心として—」『密教研究』44、2012 年、125-137 頁。（査読無）

③加納和雄、「『宝性論』弥勒著作説の下限年代再考—敦煌梵文断簡 IOL Khot S 5 と Pelliot 2740 の接合復元と年代推定—」『印度学仏教学研究』60、2012 年、168-174 頁（査読有）

④加納和雄、「アティシャに由来するレティン寺旧蔵の梵文写本－1934 年のチベットにおける梵本調査を起点として－」『インド論理学研究Ⅳ』、2012 年。123-161 頁。（査読無）

⑤加納和雄、Eight Folios from a Sanskrit Manuscript of the Mahāyānasūtrālaṃkārabhāṣya from Ngor Monastery: Diplomatic and Critical Editions on X.9-XI.3 —Studies of Göttingen Xc14/57 (1)—. *China Tibetology* 18, 2012. pp. 33-47 （査読無）

⑥加納和雄、張本研吾、Fragments of a Commentary on the Tattvasaṅgraha, Part 2, *Journal of Nepal Research Center* 14, 2012,pp.5-17.（査読無）

⑦加納和雄、「チョムデンリクレル著『大乗究竟論荘厳華』和訳および校訂テクスト（２）—『宝性論』I.4-22 の注解—」、『高野山大学論叢』48、2013 年 3 月、1-14 頁。（査読有）

⑧加納和雄、「ラトナーカラシャーンティの諸著作における如来蔵理解の二類型」、『密教文化』225、2011 年（2013 年 7 月出版）、7-35 頁。（査読有）

⑨加納和雄、「『大乗荘厳経論』ゴル寺伝存貝葉写本の翻刻—第 54 葉: 第 17 章 27-39 偈—」、能仁正顕編『『大乗荘厳経論』第 17 章の和訳と注解—供養、師事、無量とくに悲無量—』、自照社出版、2013 年、216-220 頁。（査読無）

⑩加納和雄、「ヴァイローチャナラクシタ作『大乗荘厳経論』注－第 17 章注釈箇所のテクストと試訳－」、能仁正顕編（同上）、2013 年、221-257 頁。（査読無）

⑪加納和雄、「*Ekagāthā, Caturgāthā, Gāthā-dvayadhāraṇī*—11 世紀のインド仏教における読誦経典— 」、『密教文化』227、2011 年（2013 年刊行）、49-88 頁。（査読有）

⑫加納和雄、李学竹、葉少勇、“Further Folios from the Set of Miscellaneous Texts in Śāradā Palm-leaves from Zha lu Ri phug: A Preliminary Report Based on Photographs Preserved in the CTRC, CEL and IsIAO,” *China Tibetology* 20, 2013. pp. 30-47（査読無）

⑬加納和雄、「『宝性論』の展開」、下田正弘編、『シリーズ大乗仏教第八巻「如来蔵と仏性』、春秋社、2014 年、206-247 頁（査読無）

⑭加納和雄、李学竹、「梵文『牟尼意趣荘厳』（*Munimatālaṃkāra*）第一章の和訳と校訂－冒頭部－」、『密教文化』229、2012 年(2014 年 2 月刊行)、37-63 頁。（査読有）

⑮加納和雄、川崎一洋、「リンチェンサンポ著『チャクラサンヴァラ・アビサマヤ注』－蔵文校訂テクスト－」、『高野山大学論叢』49, 1-36 , 2014 年（査読有）

⑯加納和雄、「Mahāyānottaratantraparicaya－カシュミール由来の新出の『宝性論』注梵文断片－」、『印度学仏教学研究』62-2、2014 年、152-158 頁。（査読有）

⑰加納和雄、李学竹、葉少勇、Another Sanskrit folio of the *Yuktiṣaṣṭikāvṛtti* from Tibet, *ARIRAB* 17, 2014, pp. 189-194（査読無）

⑱加納和雄、「『普賢成就法』の新出梵文資料について」、『密教学研究』46、2014 年、61-73 頁。（査読有）

⑲加納和雄、上野隆平、早島慧、間中充、「『大乗荘厳経論』ゴル寺旧蔵貝葉の翻刻－第 27 葉: 第 XI 章 14-27 偈－」、『龍谷大学仏教文化研究所所報』、2014 年、31-54 頁（査読無）

⑳加納和雄、李学竹、「梵文『牟尼意趣荘厳』第１章末尾部分の校訂と和訳－『中観光明』一乗論証段の梵文断片の回収－」、『密教文化』232、2014 年、7-42 頁。（査読有）

㉑種村隆元、加納和雄、倉西憲一、「Ratnarakṣita 著 *Padminī* 研究資料概観」、『大正大学綜合仏教研究所紀要』36、2014、163-176。（査読有）

㉒加納和雄、「近年の初期ガンダーラ語大乗仏

典写本研究について—研究紹介と雑感—」、『密教学会報』52、 2014 年、53-65。（査読無）

㉓加納和雄、李学竹、Sanskrit Verses from Candrakīrti's *Triśaraṇasaptati* Cited in the *Munimatālaṃkāra*. *China Tibetology* 22, 2014, pp. 4–11. （査読無）

㉔加納和雄、「写本と挿絵入装飾経」、小峰彌彦・勝崎裕彦・渡辺章悟編『般若経大全』、春秋社、2015 年、409-424 頁。（査読無）

㉕種村隆元、加納和雄、倉西憲一、「ラトナラクシタ著『パドミニー』の冒頭偈および廻向偈」、*Acta Tibetica et Buddhica*、2014 年。（査読無）

㉖加納和雄、李学竹、Restoration of Sanskrit text in missing leaves (fols. 2, 6, 7) of the *Abhidharmasamuccaya* manuscript on the basis of the *Abhidharmasamuccayavyākhyā* manuscript. *China Tibetology* 23, 2014, pp. 53–63.査読無

㉗加納和雄、Six Tibetan Translation of the *Ratnagotravibhāga*. *China Tibetology* 23, 2014, pp. 76–101. （査読有）

㉘加納和雄、李学竹、葉少勇、「『菩薩律義二十』の梵文断片」、『密教学会報』53、2015 年（査読無）

㉙加納和雄、李学竹、「梵文校訂『牟尼意趣荘厳』第一章(fol. 48r4–58r5)—『中観五蘊論』にもとづく一切法の解説—」、『密教文化』234、2015 年 3 月付、7–44 頁（李学竹との共著）。（査読有）

㉚加納和雄、Sajjana's *Mahāyānottaratantra-śāstropadeśa*: Annotated Translation.『高野山大学大学院紀要』14、2015年3月付。（査読有）

㉛加納和雄、Transmission of Sanskrit manuscripts from India to Tibet: In the case of a manuscript collection in possession of Atiśa Dīpaṃkaraśrījñāna. In: Carmen Meinert (ed.), *Periphery as Centre-Transfer of Buddhism in Central Asia*. Brill, 2015.（印刷中）（査読有）

㉜加納和雄、「サキャ南寺蔵の梵文写本覚え書き」、科学研究費成果報告書「チベット仏教寺院補修作業のための基礎データ集成の作成と公開—現状記録と原型再現—」、2015 年、印刷中（査読無）

〔学会発表〕（計 13 件）

①加納和雄、Materials under preparation for *Manuscripta Budddhica* series—Eleventh century Yogācāra Works by Sajjana and Vairocanarakṣita—. International Workshop of the *Manuscripta Buddhica* Project. Naples, University of Naples L'Orientale. 2011. 5.

②加納和雄、「敦煌出土梵文断片にみる『宝性論』の引用—IOL Khot S 5 と Pelliot 2740—」、平成 23 年度密教研究会学術大会、高野山大学、2011 年 7 月。

③加納和雄、「『宝性論』弥勒著作説の下限年代再考—敦煌梵文断簡 IOL Khot S 5 と Pelliot 2740 の接合復元と年代推定—」、日本印度学仏教学会第 62 回学術大会、龍谷大学、2011 年 9 月。

④加納和雄、「インド後期密教における如来蔵への言及とその解釈—タントラ注釈書を中心として—」、第 44 回日本密教学会、2011 年 10 月。

⑤加納和雄、「チベット伝存梵文写本に残る密教典籍をめぐる近年の研究動向」、平成 24 年度密教研究会学術大会、高野山大学、2012 年、6 月 8 日。

⑥加納和雄、「チベット伝存の仏典梵文写本の由来・伝播および近年の研究動向」、密教文化研究所、2013 年 1 月 17 日。

⑦加納和雄、「カシュミールからチベットに伝わった仏典梵文写本」、平成 25 年度密教研究会学術大会、高野山大学、2013 年、7 月 13 日。

⑧加納和雄、「Mahāyānottaratantraparicaya—カシュミール由来の新出の『宝性論』注梵文断片—」、日本印度学仏教学会第 64 回学術大会、松江、2013 年 9 月 1 日。

⑨加納和雄、「カシュミールに流伝した密教の一断面—シャーラダー諸写本に伝存する梵文密教文献をもとに—」、日本密教学会、2013 年 11 月 1 日。

⑩加納和雄、「チベット語史料・伝記類に言及されるチベット伝世梵文写本—ターラナータ、シトゥ、ゲンドゥンチュンペーを中心に—」、高野山密教研究会、高野山大学、2014 年 7 月 11 日。

⑪加納和雄、「チベットの寺院に伝わるサンスクリット写本」、龍谷大学仏教文化研究所談話会、龍谷大学大宮学舎、2014年7月24日。

⑫加納和雄、「チベットに伝存するサンスクリット写本とその由来」、綜合仏教研究所公開講座、大正大学（綜合仏教研究所研究室１）、2015年1月23日。

⑬加納和雄、From Kashmir to Tibet: A set of proto-Śāradā palm leaves and two works on the Ratnagotravibhāga, Di., 21. April 2015, 10:00-13:00, Venue: Institut für Kultur- und Geistesgeschichte Asiens, Seminarraum 1 (Apostelgasse 23, 1030 Wien), Organisation: Pascale Hugon, 2014.4.21.

〔その他〕ホームページ

https://koyasan-u.academia.edu/KazuoKano

（上記全論文の PDF を公開）

６．研究組織

(1)研究代表者　加納和雄（KANO, Kazuo）
高野山大学・文学部・准教授
研究者番号：00509523